

| | |
|--------|---|
| 研究課題 | 豊かな読み手を育てる国語科物語授業の創造 |
| 副題 | ～ICTを活用した、個の思考を大切にする授業実践を通して～ |
| キーワード | |
| 学校/団体名 | 公立宇美町立宇美小学校 |
| 所在地 | 〒811-2101 福岡県糟屋郡宇美町宇美3丁目9-1 |
| ホームページ | https://www.town.umi.lg.jp/site/umies/ |

1. 研究の背景

本校教育目標の重点目標の中に「1人1台端末の活用」がある。これは本校には「一人一人が大切にされていることを実感できる学校づくりを第一義とすることを再確認する必要がある」という教育課題があるからである。しかし、昨年度までは1人1台端末を十分に活用することができていなかった。これは令和5年度全国学力・学習状況調査児童質問紙の回答結果を見ても明らかである（資料1）。

| 質問事項 | 全国 | 本校 |
|--|------|------|
| (29) 5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか（ほぼ毎日、週3回以上と回答した児童の割合） | 62.4 | 34.0 |
| (30) 学習の中で、PC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか（役に立つ、どちらかといえば役に立つと回答した児童の割合） | 95.1 | 97.9 |
| (43) 国語の勉強は好きですか | 61.5 | 54.3 |

資料1 児童質問紙回答結果

本校は、Chromebookを1人1台端末として使用しており、児童の多くは、Chromebookの活用に対して利便性を感じている一方、授業ではあまり活用していないと感じていることが明らかになり、教職員がより積極的にChromebookを活用した授業を行うことが求められているということが分かった。

また、資料1から児童が国語科の学習に対して抵抗感を抱えていることも明らかとなった。授業中の姿を見ると、問いに対して自分の考えをもつことができず、交流活動においては他者の考えを一方向的に聞くだけの児童が多いように思われる。自分の考えをもつためには、授業の前に教材とじっくりと向き合う時間が必要だと考えた。

2. 研究の目的

研究の背景で述べた、本校の教育課題改善と児童の実態改善を目指すために、「ICTを積極的に活用した、予習－授業－復習が往還した授業実践」を行った。

| 学習場所 | Chromebookを活用した小学校国語科 読むこと領域 文学的な文章の授業 | ICT活用 |
|------|--|------------|
| 家庭 | 〈予習〉 本時場面を読み、予習課題の答えをPadletに打ち込む (ICT) | 個の思考 |
| 授業 | 〈めあての確認〉 「(例) どうして～なのか話し合おう」 | |
| 授業 | 〈予習課題について交流〉 Padletを見ながら予習課題について交流する 思考ツールを使ってグループ交流を行う (ICT) 〈読み深めの課題〉 教材研究により教師が設定する 思考ツールを使ってグループ交流を行う (ICT) | 協働的な 学び |
| 授業 | 〈表現物提示〉 「確かめの表現物」と「発展の表現物」の2つから児童が選択できるよう提示する (ICT) 〈振り返り〉 自分の読みがどのように深まったかスクールタクトにYWTで記入する (ICT) 〈次場面の予習課題の確認〉 | 個の思考 |
| 家庭 | 〈選択した表現物をスクールタクトに記入〉 (ICT) 〈次時の予習〉 (ICT) | 個の思考 |

資料2 1単位時間の授業展開

資料2は、1単位時間の授業展開である。各展開における内容については、以下のように設定した。

① 予習課題

教師は前時の終末段階で、予習課題の内容を伝える。「なぜ、どうして」のような課題解決型の問いに対する自分の考えを、Padletに記入する。課題に関しては、単元の始めに児童と一緒に設定することも考えられる。

② 交流活動

予習課題や読み深めの課題について思考ツールを用いたグループ交流を行う。交流の際には、考えを記入するだけでなく、交流によって生まれた新たな考えを書き足したり、考えの関係性を矢印で表したりする。

③ 読み深めの課題

「なぜ(どうして)」「どのような」のような課題を設定し、登場人物の言動や心情について、自分なりに理由や根拠をもって考えをつくることができるようにする。基本として、2学年以降は同様に課題を設定していく。

④ 振り返り

本時の授業を「Y(やったこと)」「W(わかったこと)」「T(家庭学習で行うこと)」の3つの視点で振り返る。「Y」では、予習課題または読み深めの課題のうち、交流を通して自分の考えが深まった方を選択する。「W」では、本時の学習を通して、自分の読みが変化した点や強化された点について記入する。「T」では、後述する表現物のうち、家庭学習で書いてくる方を選択する。

⑤ 表現物作成

家庭学習の中で、本時の理解を確かめるための「確かめの表現物」、より発展的に理解を深めるための「発展の表現物」を児童に提示し、理解度に応じて児童に選択させる。「確かめの表現

物」は本時で主として取り扱った登場人物、「発展の表現物」はそれ以外の主な登場人物の行動や心情を振り返ることができるものを設定する。

3. 研究の経過

| 時期 | 取組内容 ※（ ）内は公開授業学年 | 評価のための記録 |
|--------|----------------------|----------------------|
| 6月19日 | 提案授業（5年生） | 観察記録・写真（児童） 教師の所感 |
| 10月15日 | 全員研修授業（6年生） | 観察記録・写真（児童） 教師の所感 |
| 11月22日 | 全員研修授業（3年生） | 観察記録・写真（児童） 教師の所感 |
| 2月25日 | 全員研修授業（1年生） | 観察記録・写真（児童） 教師の所感 |
| 3月 | 児童の実態把握 | アンケート調査（児童） |

4. 代表的な実践

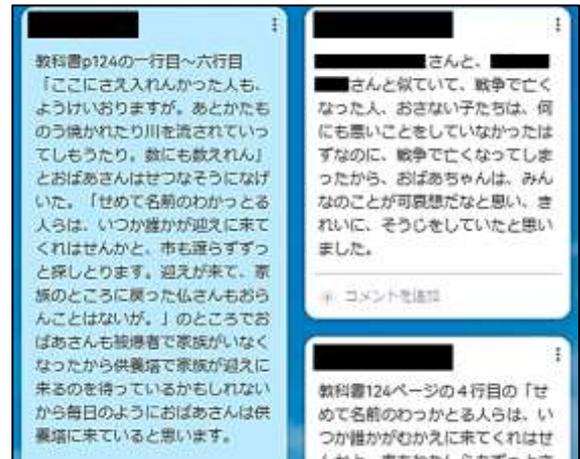
第5学年国語科物語教材「たずねびと」（光村図書）において実践したことを報告する。

① 予習課題

本時において、おばあさんがたいい供養塔の近くにいる理由について考え、Padletにその理由を記入させた。資料4はPadletに記入した予習課題に対する児童の考えである。

児童は、教科書の叙述に着目したり、友達の考えを参考したりすることで、予習課題に対する自分の考えを記入していた。

予習の段階で、他の児童の考えを見ることができると、資料5のように予習課題の交流は教師が意図的に指名した児童の考えをもとに、考えを深めていった。



資料4 予習課題に対する児童の考え

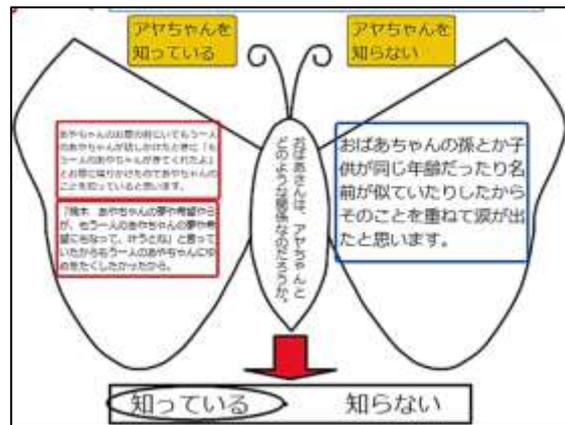


資料5 代表児童の発表

②③交流活動・読み深めの課題

本実践では、読み深めの課題において思考ツールを用いた交流活動を位置付けた。読み深めの課題を「おばあさんは、アヤちゃんとのような関係なのだろうか」と設定した。

「知っている」と「知らない」の2つの立場に立って考えさせるため、バタフライチャート図を用いた。資料6は、ある班で交流活動をした後のバタフライチャート図である。



資料6 バタフライチャート図

本校は授業支援クラウドとしてスクールタクトが導入されているため、スクールタクト上でバタフライチャートを用いて、考えを整理させた。その時の交流活動の様子が資料7である。



資料7 思考ツールを用いた交流活動

考えを入力するのに集中しすぎて交流活動に参加しない児童を出さないようにするために、班交流が始まったら、代表者1人のChromebookを使って思考ツール上で考えを整理するようにしている。

④振り返り

資料8は、児童が書いた振り返りである。この児童は、おばあさんは「アヤ」のことを知っていたという考えをもっていたが、全体交流で別の班の児童が「教科書の叙述からはどちらの考え方もできるため、どちらか一つに決めることはできない」と述べたことで、どちらの読み取り方もできるということに気が付いていた。

| | |
|---|--|
| Y | おばあさんは、あやちゃんとのような関係なのだろうか |
| W | おばあさんとあやちゃんとの関係なのかは、おばあさんがあやちゃんを知っている。知っていないのどちらとも言えることがわかった。わたしは、おばあさんがなくなったあやちゃんのことを知っていたと思います。わけは、綾が「私と名前がおんなじおんなのこがいたんです。」のところで、おばあさんが泣いていたから、アヤちゃんと知り合いだと思いました。 |
| T | <input type="checkbox"/> 綾への手紙 <input checked="" type="checkbox"/> おばあさんへの手紙 |

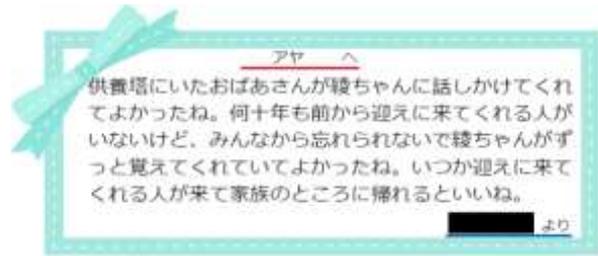
資料8 思考ツールを用いた交流活動

⑤表現物作成

本時では、確かめの表現物として「綾」、発展の表現物として「おばあさん」を設定した。しかし、「アヤ」に手紙を書きたいという児童の発言から、発展の表現物に「アヤ」を追加した。

資料8は、「アヤ」を選択した児童の手紙である。

この児童は、本時で中心人物の「綾」の心情について読み深めたことから、叙述からは心情を読み取る事ができない「アヤ」の心情についても考えることができていた。



資料8 児童が書いた表現物

5. 研究の成果

ICTを活用して、予習－授業－復習が往還した文学的授業を行うことは、児童の読みを深めるに当たって有効であると考えます。特に、今まで自分の考えを十分にもつことができていなかった児童にとっては、予習で他者の考えを参考にすることができるため、何かしら自分の考えをもった状態で授業に臨むことができていた。また、交流活動において思考ツールを用いたことで、考えを視覚的に整理することができていた。本時の学習内容を、表現物作成という形で家庭学習の中で振り返りをしたことで、再度思考を整理することができたため、読みを深める手立てとしては有効だった。

6. 今後の課題・展望

単元の全場面で「なぜ（どうして）」「どのような」のような課題解決型授業にしてしまうと、授業の中で叙述をじっくりと読んで登場人物の心情を捉えることが難しいため、場面に応じて課題解決型授業と叙述をじっくりと読む授業を使い分けていく必要があると考えます。

また、児童も教師もICT活用の利便性を感じることはできているが、現時点では教師が選択したツールを一方向的に与えているため、本当に児童が必要としているものかは分からない。そのため、来年度は、児童がツールを選択するような自由度の高い授業へと転換していくことも必要だと考える。

7. おわりに

本研究は、昨年度より取り組んだ校内研究の2年目の実践である。昨年度はICTの活用まで至らず、「予習－授業－復習」を往還させた国語科学習の実践にとどまっていた。アナログの良さも実感するが、ICTを活用することで「個」でじっくりと考えをまとめる時間を確保できたり、思考ツールを活用することで「集団」で考えをまとめたりすることが容易にできることが分かった。そのため、教師も児童もICTの利便性を大きく実感するに至った。しかし、本校の実践は未だに「学習者主体」ではなく「授業者主体」である。全ての学習で学習者主体の授業を行うことは困難だと思われるが、来年度は教科を問わずに研究を進めるべきと考える。教師も児童もICTの利便性を感じることができるようになった今だからこそ、児童も自らが効果的なICT活用を選択することができると思われる。

今年度の実践は、公益財団法人 パナソニック教育財団「2024年度(第50回)実践研究助成」を受けて行った成果の一部である。このような実践をする機会を与えていただいたことに、感謝

を申し上げる。

8. 参考文献

- ・ 奈須正裕（2023）「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して
北大路書房，京都府
- ・ 佐藤学（2023）新版 学校を改革するー学びの共同体の構想と実践，岩波書店，東京
- ・ 佐藤学（2021）学びの共同体の創造ー探求と共同へー，小学館，東京都